

様式 F-7-1

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成24年度）

1. 機関番号	4 2 6 7 6	2. 研究機関名	大妻女子大学短期大学部																												
3. 研究種目名	基盤研究(C) 平成24年度～平成26年度																														
5. 課題番号	2 4 5 2 0 5 9 8																														
6. 研究課題	ピア・レスポンスの何が文章の質的向上と評価結果に影響するのか																														
7. 研究代表者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究代表者名</th> <th>所属部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2 0 4 1 9 4 8 5</td> <td>ナカオ ケイコ 中尾 桂子</td> <td>国文科</td> <td>助教</td> </tr> </tbody> </table>			研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名	2 0 4 1 9 4 8 5	ナカオ ケイコ 中尾 桂子	国文科	助教																				
研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名																												
2 0 4 1 9 4 8 5	ナカオ ケイコ 中尾 桂子	国文科	助教																												
8. 研究分担者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究分担者名</th> <th>所属研究機関名・部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>8 0 2 8 8 3 3 1</td> <td>タナカ ノブユキ 田中 信之</td> <td>北陸大学・留学生別科</td> <td>准教授</td> </tr> <tr> <td>6 0 3 3 0 4 8 7</td> <td>フクオカ スミコ 福岡 寿美子</td> <td>流通科学大学・商学部</td> <td>教授</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名	8 0 2 8 8 3 3 1	タナカ ノブユキ 田中 信之	北陸大学・留学生別科	准教授	6 0 3 3 0 4 8 7	フクオカ スミコ 福岡 寿美子	流通科学大学・商学部	教授																
研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																												
8 0 2 8 8 3 3 1	タナカ ノブユキ 田中 信之	北陸大学・留学生別科	准教授																												
6 0 3 3 0 4 8 7	フクオカ スミコ 福岡 寿美子	流通科学大学・商学部	教授																												
9. 研究実績の概要	<p>本研究は、<A>対面方式、非対面方式でのピア・レスポンス2形態、留学生、日本人学生、留学生と日本人学生混在の3タイプのメンバー、といった<A>「活動形態」と「学習者タイプ」の違いにおける、ピア活動実施後の学生の意識、評価点向上の条件としてあり得る観点と、それらの関係を調べることが目的である。</p> <p>24年度前期は、3タイプのクラスでの対面式ピア・レスポンス実践と、2タイプの授業での非対面ピア・レスポンスを実践した。前期終了後の8月に、担当者による実践報告会を開催し、前期授業で実施した授業活動が、ピア・レスポンス活動として機能していたか、また、実施した授業形態がどのようなタイプのクラスとなつたかについて意見を交換した。報告会と併せて、研究分担者である北陸大学の田中信之氏によるワークショップを開催し、研究分担者間での取り組みや実践に大きな差が生じないよう、ピア・レスポンスに対する理念と実践形態におけるコンセンサスを強化した。</p> <p>24年度後期は、前期のコースデザインを修正、発展させ、2タイプのクラスで、対面、非対面の授業実践を行った。学期末の25年2月に研究分担者間報告会を開き、実践方法、条件、利点、問題点を考察した。2月は、ピア・レスポンス指導の研究者である原田三千代氏（桜美林大学非常勤講師）を招き、方法と問題点に対する改善方法についてコメントをもらった。</p> <p>研究代表者は、この他に、文の結束性判断の観点を用いた場合の、コレスポンデンス分析、クラスター分析の有効性を検討し、夏期と学期末の研究会で発表して有識者の意見を求めた。今回は、ピア・レスポンス体験と被体験日本人学生の2タイプのテキストと、ピア・レスポンス体験、被体験留学生の2タイプのテキストと、学生がアカデミック・ライティング指導の目標とする学術論文テキスト、院生の論文テキストの、計6タイプのテキストの文体を比較した。</p>																														